居住空間デザイン研究室

Living Space Design, Art and Architecture Lab.

郡 裕美

KORI, Yumi / Professor

空を想う ――様々な居心地良さを内包する、新しい空港トランジット施設――

Airport as Living Space, New Transit Facility for Kansai Airport

日本の空港は欧州――北米を繋ぐ中継地点という素晴らしい立地にもかかわらずハブ空港としての機能は無くアジアの中で遅れをとっている。

そして私自身が体験し感じたこと。出発までの間ワクワクした気持ちで待っている。出発まで微妙な時間があるが夜中の空港はほとんど何も営業していない。ベンチに座り、寝るか何かして時が過ぎるのをただ待つばかりで退屈だ。空港内を歩いてみるがシャッター街のようだ。

このように深夜や早朝に利用する方にとって時間まで不便な環境でただ時間が過ぎていくのを待つ状況、環境をどうにか改善したい。そして乗継の間や出国してから目的地に着くまで自然な空気を感じる事が少ないので、それを感じられる空間も提案した。

関西国際空港を利用・経由する、夢を持った人々が集う空間へと変える。日本で唯一4000m級の複数滑走路をもつ24時間運用可能な関西国際空港をハブ空港へと発展させ、関空の強みを生かした独自性のある空港を目指す。

畔道 菜々美
AZEMICHI, Nanami

本と出会う散歩道　――都市の余白としてのライブラリー――

Library as a Stroll Garden

▲大学側から見た様子

外の空間を多く設け、大学側との関係を持たせている。

梅田の街には高層ビルや商業施設が建ち並び都市の余白が少なく、窮屈感を感じることがある。実際大阪には梅北広場など開いた場はあるが、茶屋町にはそのような空間はあまりない。そこで街に開いた広場のような空間を設けることで人々が気軽に集える交流施設を提案した。

気軽に集える空間をテーマにアプローチは4つ設け建物内部と外部空間を行ききしやすく、動線が自由にあるイメージとした。敷地の形状に合うように直交以外にも広がり狭まりをつくり、空間の見え方に変化をつけている。大学側には開いた空間を設け関係を持たせている。軒下や外でカフェを行える場を設け、中間のような空間を設けた。建物内部には入りやすい形状にし奥へ進むと中庭が見てくる。思わず内部に入ってしまい人々はそこで本と出会い交流が生まれる。外で寝転んで読書をしたり、自然の空間を感じることができるようになっている。人びとが集い賑わいが生まれるような設計提案とした。

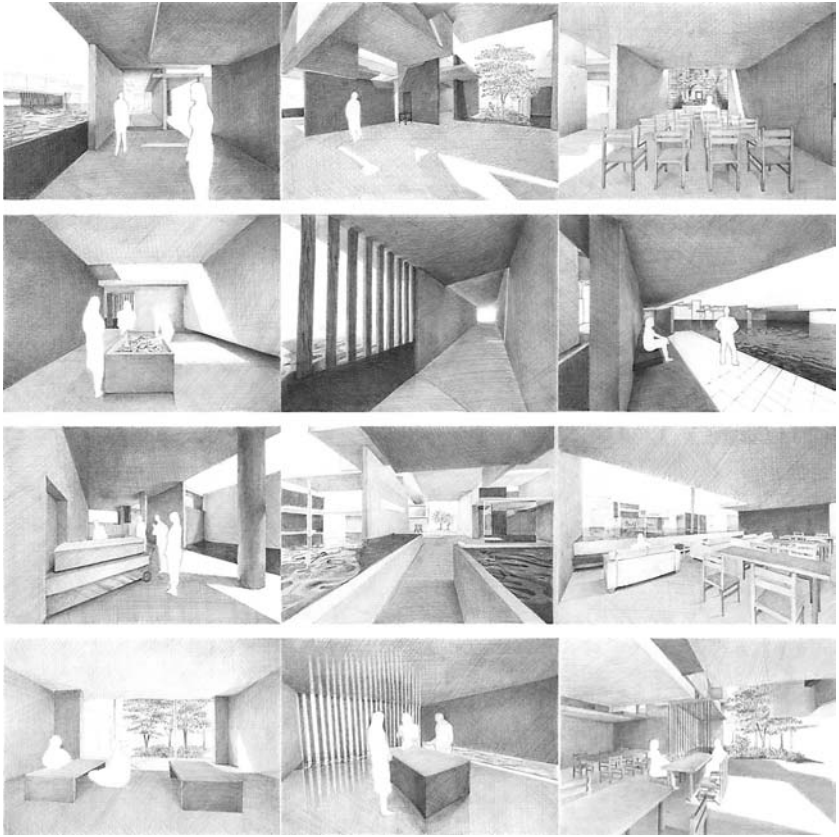
緒方 敦哉
OGATA, Atsuya

光に溶けて　──都市に建つ葬斎場──

Dissolving into Light, Design Proposal for a Urban Funeral Hall

現代の都市に存在する葬斎場は、日頃生活している世界との距離が近すぎて気持ちの整理ができていないままに作業的に儀式を済ませてしまうことが多いと感じる。

そこで私は、建築で埋め尽くされた都市環境の中の限られた土地で、「奥行きと気配」を感じる空間をデザインすることで、日常との距離をさりげなく図りながら、故人との最後の時間を心に刻むことにできる葬斎場を提案する。



奥村 収一

OKUMURA, Shuichi

わんぱくこども園　──自然豊かな公園に内包された保育施設──

Kindergarten in a Nature Park

幼児期は自然との触れ合いや人との関わりなど、直接的な体験を通し社会性を身につける重要な時期である。しかし保育施設はアクセスの良さが重視され、住んでいる環境と似たものになりがちだ。自然豊かな公園内に設計することで住んでいる環境以上の多様な体験ができる。この場でのびのびと育つことで園児は里山に関心を持ち愛着を抱くと考えた。そして自然との共生の仕方を学ぶ場にもなり得るだろう。公園に内包され、カフェを併設したこの保育施設は保護者・園児・保育施設・公園・公園の利用者・自然のつながる空間であり、コミュニティのよりどころにもなる。

この保育施設は複雑な傾斜地に高さの異なったボリュームを分棟型で構成し廊下でつないだ。園児は建物の内外や上下に様々な居場所を発見しながら遊ぶことができる。自然に囲まれ立体的につながりのある保育環境を目指した。

木下 哲弥

KINOSHITA, Tetsuya

越境の復権　――タクティカル アーバニズム的な大阪「新世界」の再生――

Reviving Osaka Shinsekai by Transboundary

私は新世界にいた。

その当時は通天閣、動物園、フェスティバルゲートといった歓楽地に様々な人々が集い、賑わっていた。

だが現在は釜ヶ崎や日雇い労働施設の影響で労働者の盛り場となり、かつてのルナパークやフェスティバルゲートといった大型資本は廃れていったため、若者や家族連れの姿が消えた。

新世界は大阪の観光地としての魅力を取り戻していかなければならない。

ディープな大阪として知られる新世界はこれまでのように大型資本を取り入れるのではなく、既存の町並みを残しながらタクティカル・アーバニズム的に人々が行動し、再生させていくのではないだろうか。

空き家や道路、空き地などの余白の空間に増築、減築、仮設を織り交ぜ、街に回遊性を持たせ、大阪らしさを取り戻していく。

小元 大輝

KOMOTO, Hiroki

よりみちアーケード　――商店街の空き家再生を通した立体散歩道の提案――

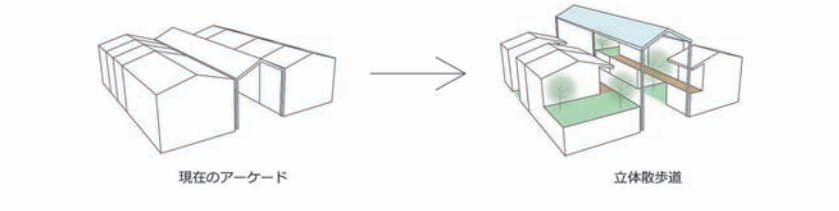
Multi-Layered Arcade

現在、日本では空き家が増え続けていることが問題となっている。その多くの空き家が密集し、暗く、怖い印象の町は少なくない。そのような町を明るく、人が集まる町に変わるための拠点となる空間をひとつの事例として提案する。

再生するのは8割が空き店舗で、建物が隙間なく並び、アーケードの屋根が低く、風や光が入らない、シャッター街。

隙間なく並ぶ建物を広場などに変え、またアーケード自体にも高い位置に空中広場をつくった。そして、建物の2階の一部を減築し、2階も買い物や、休憩をしながら歩き回れるようにした。このように一般的な商店街にはない空間ができた。

買い物をしに来る人はもちろん、ふらっと散歩しに来る人や、広場に遊びに来る人、そして通勤、通学にここを通る人など、この町の様々な人がちょっと寄り道をしたくなるような空間がたくさんある、明るい、にぎやかなアーケードになっている。



谷口 志帆
TANIGUCHI, Shiho

かえろう　──農業体験ができる分棟型宿泊施設──

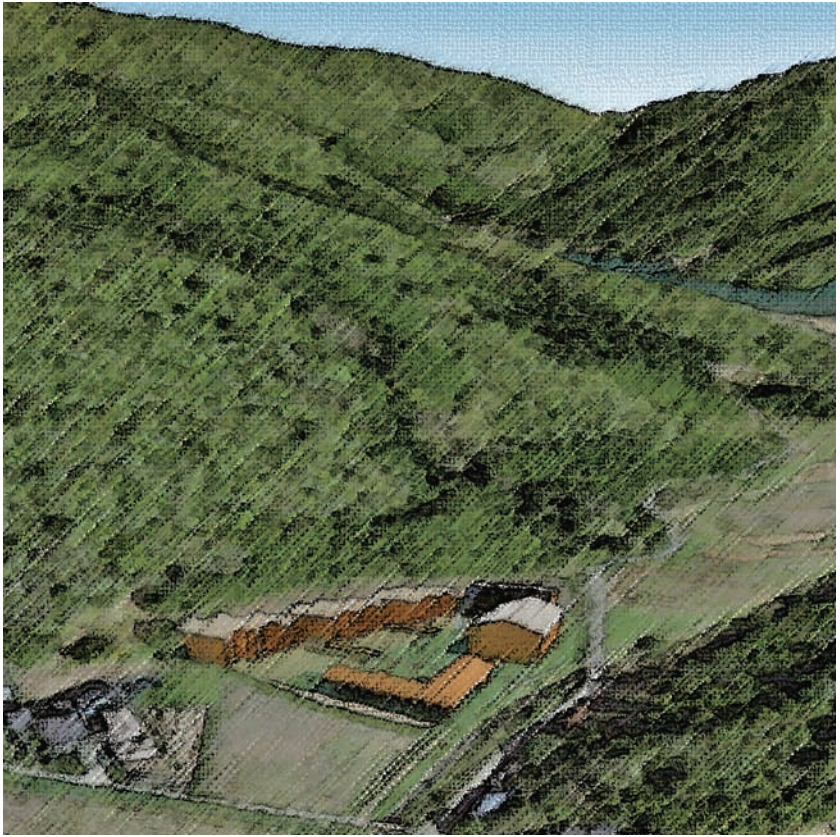
Shared Accommodation Facility to Experience Agriculture

現在、若者の農業離れが進んでおり、各地の農村部で高齢化による人材不足や、空き家、耕作放棄地の増加などが問題となっている。また、都市に人口が集中し、田舎の過疎化も問題となっている。その一方で、田舎というものに良い印象を持っている人々は多く、将来的には田舎暮らしをしたい人や、都会暮らしの生活の中で、たまには田舎の空気を感じたいという人も多い。また、農泊という農業を体験しながら田舎の家に宿泊するという取り組みも人気であり、ただ宿泊するだけでなく、リアルな田舎暮らしを体験することが出来る。

私の祖父母が住んでいる地域もかつては景色一面畑や田んぼでいっぱいであったが、現在では上記のであげたような問題に直面していると感じ、小さい頃から思い出のあるこの地域を活性化させたいと考えた。農業を体験しながら田舎の良さを感じ、どこか懐かしい気持ちに帰れるような体験型宿泊施設をつくろうと思った。

中山 周作

NAKAYAMA, Shusaku



「おはよう」が聞こえるまち　――シェアからはじまる暮らし――

Proposal for a New Sharing Community

気づけば、まちの中で孤立し、ただ住んでいた。いつも日が暮れてから、まちに、そして家に帰って来る。顔も名前も知らず挨拶もしたことのない人の家に囲まれた、そんな家で生活している。都市-郊外モデルが擁立され、核家族を前提とした住まいが構築されてきた。そこにあったのは、会社と核家族という２つのコミュニティだった。そして今、単身世帯が最も多い社会に変化してきている。個が孤立しない、個がつながる新しいコミュニティのための場が求められる時代になった。

個人がつながりコミュニティを生み出せる環境を、シェアを通じた暮らしとしてカタチにする。住む、泊まる、つくる、売る、学ぶなどの動きでまちをシェアさせることで、そこに新たなコミュニティと新たな暮らしが生まれる。そのため建築は、ハコとして完成させるのではなく剥き出しの構造を残すことで、創造のきっかけをつくりながら創造の余地を残した場として設計した。

花田 遼汰
HANADA, Ryota

「見る」と「シェア」で交流を生む　――自然と地域に溶け込む小学校の提案――

Merging into the Suroundings, The Elementary School in Nature

近年、少子高齢化や核家族の増加、SNSの発達から小学生が人と交流する機会が減少している傾向にあり、授業では学ぶことのできない経験や体験を損失してしまっている。

また、小学生は多くの人と関わり、多くの事を経験することで心身ともに成長していく最も大切な時期である。それなのに、交流する機会が減少しつつある現在、私はこのことを変えるために、小学生と地域の方が「見る」と「シェア」を利用し、自然と交流が生まれるような空間を考えた。そこで、小学校の中に地域の方も利用できるスペースを設け、見る見られるの関係を築き、小学生は興味を示し、貴重な体験になる。

地域の方は、小学生の元気な姿を見て、パワーをもらう。また、図書スペースやホール、調理室などをシェアすることによって、交流が増え、一つでも多くの経験ができる場所となることを望む。

松浦 史明
MATSUURA, Fumiaki

水辺のウエディング　――ゴンドラで回游する滞在型テーマパークの提案――

Wedding Hall in the Water Theme Park

私は大阪港近くの観光施設でアルバイトをしています。多く観光客が訪れるのに対して宿泊施設が少ないと感じました。そのため別の場所へ移動するので丸1日この場所で過ごす人は少ないです。また、大阪港には観光船や海外からの渡航、交通手段としてよく船が利用されています。

そういった部分からただ宿泊するのではなく、船が利用されるこの場所で交通手段をゴンドラとし、宿泊施設を兼ねた結婚式場を提案します。観光客は宿泊施設として利用し、結婚式を上げた新郎新婦は大阪港の船で新婚旅行へ向かいます。

このように大阪港と施設の共存を目指すことで非日常空間を設計しました。

山際 千晶
YAMAGIWA, Chiaki

「自然」に回帰する団地　――泉北ニュータウン原山台の再生提案――

Conservation Design for the Low-Income-Housing in Semboku Newtown

大阪府堺市に位置する泉北ニュータウンは、2017年にまちびらきから50年を迎えた。人口の減少や少子・高齢化の進行、若年層の転出など様々問題に直面している中で、一部の住居のリノベーションなどが行われているが、建て替えや更地にする財源もなく、郊外のニュータウンの団地を対象とする具体的なモデルプランが存在しない状況にある。

そこで、団地の豊かな自然環境を既存の生活空間に取り込みながら自然とともに成長していく団地を提案する。団地の階段空間、中庭、屋上、空き家部分などを活用し、それぞれの住居に小さな空間が生まれ、人々の暮らしが外部の領域にも広がりながら更新される暮らしがそこで展開される。日常に小さな楽しみが増加していき、自然とコミュニティが広がっていく。

また、郊外の生活における移動の中心となる車と連携する仮設空間を設け、配食サービス、バス停、仮設店舗、予防医療などによって現状の問題を解決しながら、高齢者も安心して住むことのできる団地に更新される。

渡辺 葉輝
WATANABE, Yoki